

## 第二回国際双翅学会議への出席及び発表並びに関連研究機関 における衛生・農業上重要な双翅目昆虫に関する研究交流

岩 佐 光 啓

畜産環境科学科生態系保護学講座

### 1. 目 的

第2回国際双翅学会議への出席・発表及び関連研究機関における研究交流

### 2. 期 間

1990年8月23日から9月14日まで

### 3. 場 所

チェコスロバキア・プラチスラバ市  
イギリス・ロンドン市

### 4. 内 容

#### a) 第二回国際双翅学会議への出席と発表

双翅目昆虫は、各種の病原微生物を媒介するなどして人畜に直接あるいは間接的に被害を与えたり、重要な農林害虫も数多く含み、また寄生や捕食による益虫や環境浄化に役立つ種類や環境指標昆虫となる種も多く、数多い昆虫の中でも人間の生活と密接な関係をもつ最も重要な昆虫群の1つとなっている。国際双翅学会議は、この双翅目昆虫に関する様々なテーマについて取り扱う4年に1度の国際会議で、1986年に第1回大会がハンガリーのブダペストで開催され、今回第2回大会が1990年8月27日から9月1日までの期間にチェコスロバキアのプラチスラバで開催された。会議は、形態、分類、生態、生理、生化学、遺伝、病理、医・獣医昆虫等の18の分科会（セクション）と23のワークショップおよびポスターセッションに分かれており、出席者は33カ国から300余名で計295題の演題があった。しかし、参加を申し込んでおいて出席できなかった人も多く、特に中国とソ連からの演題取消しが目立った。これは、東欧を中心とした自由化のうねりに対する締めつけであろうか。日本人の参加は、私を含めて13人が出席し、11人が口頭あるいはポスターセッションにおいて発表した。

会期中は朝9時から夕方5時までびっしりとプログラムが組まれていて、休む暇もないくらいであった。また、興味ある演題の時間帯が重なっていることも多くあり、片方しか聞けないことがあったのは残念であった。言葉の問題については、やはり障壁を取り除き難く、今後英語の聞き取り

の勉強の必要性を痛感した。特に、ロシア人とインド人の発音が聞き取りにくかった。内容的には学会誌に発表済みのものや総説的なものが少なくなく、分野によっては最新の情報を期待していた人には少々物足りない面もあったかもしれない。スライドも見にくく雑に作られているのも少なからず見受けられた。ポスターセッションは、口頭発表と同時に行なわれていてかつポスター展示の時間帯が決められていないため、他の講演を聞きに行きにくく、また他の興味あるポスターに関して何か質問をしようと思ってもその発表者が他の講演を聞きに行っていなかったりするなど、今後時間帯を決めるなどの改善の余地があるように思われた。しかし、ポスター自体は皆よく工夫されていて、写真なども豊富に用いて見やすく興味を引くように出来上がっていた。私のポスター発表は、Medical and Veterinary Dipterology のセクションで「クロイエバエとノイエバエの摂食、繁殖および牛体寄生に関する研究」なる題名で、牛の伝染性角結膜炎（ピンクアイ）の病原体を媒介すると考えられるイエバエ科の非刺咬性家畜害虫2種の摂食、繁殖方法および牛体寄生に関して比較した内容で、予想以上に多くの人から質問を受けた。その中で、マサチューセッツ大学昆虫学教室でイエバエ類の生態に関する研究を精力的に進めている J. G. Stoffolano 教授から質問を受け、お互いの情報を交換できたのは大きな収穫であった。また、California Academy of Sciences の Dr. D. E. Gross, オランダの Wageningen 大学の Dr. W. Takken, イギリスの British Museum の Dr. A. C. Pont らとも関連したことについて話ができて、大いに刺激を受けた。さらにスペインの Dr. M. A. Gonzales, イランの Dr. E. Javadian, エジプトの Dr. I. M. Kelany らから、それぞれの土地の放牧家畜に寄生するハエ類の種類と生態に関する情報を直接聞くことができた。口頭発表は、一度に多くの人に同時に聞いてもらえ、その点ポスター発表は一人一人に同じことを説明しなければならないという面倒な点もあるが、やはりお互いにじっくり話ができるという点で優れているように思われた。

発表の合間や休憩時間には、ツヤホソバエ科の分類学の第一人者であるチェコスロバキアの Dr. J. Zuska, ハネオレバエ科の分類学者であるソ連の Dr. N. P. Krivosheina, クロバエ科の分類学者で東ドイツの Dr. H. Shumann らをつかまえてはお互いの情報を交換しあった。

フェアウェルパーティーでは、チェコスロバキアの民族音楽と踊りが披露される中、各国の高名な双翅学者、名前だけ知っていた人や文通のあった人などと一堂に会して面識をもてたことは大きな喜びであった。

#### b) 大英博物館（自然史）における標本調査と研究交流

国際双翅学会議終了後、イギリス・ロンドンの大英博物館（自然史）を訪れた。この博物館については今さら言うまでもないが、昆虫学においても世界各国の昆虫類が集められ、厳重な管理のもとに保存されており、特に昆虫分類学者にとって世界で最も重要な博物館の1つである。今回の目的は、衛生上重要なツヤホソバエ科、農業上重要なハネオレバエ科および Strongylophthalmyidae の3つの科（ファミリー）のタイプ標本を調べることであった。双翅目のコレクションは3階のフロアにあり、鱗翅目昆虫と同じ部屋に整然として標本ダンスに納められていた。博物館では連絡していた Diptera（双翅目）Section のイエバエ科とツヤホソバエ科の専門家である Dr. A. C. Pont が顕微鏡を貸してくれて、目的の標本を自由に見せてくれた。大英博物館で調査・研究する場合、原則として検査料（bench fee）を徴収するようになったようだが、同じ研究者同志の交流の場合には検査料は受けとっていないようだ。標本の観察においては、あらかじめ用意してきたハエの全体図のコピーと記載表に種の特徴を書き加えていった。また、日本から持ってきた標本と直接比

較することにより種を容易に同定することができた。分類学では、文献上での分類が困難な場合がよくあり、1種類の学名の決定に何年も費やすことがある。このように直接タイプ標本をみることによってどんなに早く研究を進展させることができるだろう。その点我々の世代は恵まれているように思う。

Pont 博士とは、特にツヤホソバエの分類と生物地理に関して意見を交換した。その中で、最近西ベルリンの大学院生が採集したツヤホソバエの1種が、私が日本から新種として記載・命名した種に似ているので調べて欲しいと言われ、みたところ正に同じ種であった。この種は、日本と中国東北部に生息すると考えていたが、西ベルリンで最近発見されたことは驚きであった。日本とヨーロッパとの共通種はよくあることだが、ヨーロッパでの研究が日本より常に数十年進んでいたため、ヨーロッパで先に発見され、その後日本での生息が確認されるというのが普通であった。しかも西ドイツには高名な双翅学者が多数輩出し、調査・研究は徹底してやられてきたはずである。この種は、ごく最近東洋から分布を広げたのだろうか。Pont 博士とは大変有意義な情報・意見の交流ができた。

博物館に滞在中、合計3科90種余りのタイプ標本の特徴を記載し、日本に持ち帰った。総じて、大英博物館は昔の古い標本は豊富だが、最近の標本が少ないように思えた。特に東洋区の標本については、最近日本の研究者がアジア地域で精力的に調査・研究を進めていることもあって、日本の研究もひけをとらなくなってきたように思う。今回、自分が大英博物館にない東洋区系の種の標本をかなり持っていることにも気が付いた。この標本調査を足がかりに、日本、東洋区および旧北区東部極東地域におけるハエ類の分類、生態、生物地理に関する研究を更に進めるべく期待を抱いてロンドンを後にした。

最後に、今回の国際会議への参加および大英博物館の訪問にあたって、多大の御援助を賜った後援会に心から感謝の意を表します。